Special Program・特別プログラム

PEPPERLAND
MUSICK SPECTACLE

能勢伊勢雄　写真家

三夜連続で語られる前代未聞のムジック・スペクタクル（変遷史）。
PEPPERLAND（ペパーランド）が収蔵する3万枚を超えるレコード音源からセレクトして展開されたレコードコンサート＆レクチャー。

音楽はひとの心に魔法のように影響を与え、人生を変えるような力をもっています。音楽のもつ力とこの力を強く秘めた音楽を称して「ムジック MUSICK」。と呼びます。ミュージック(音楽)とマギック(魔術)の合成語であるこの「ムジック」が、現代を生きる私たちに、どのような影響を与えてきたのか。三十五周年を迎えた Live House PEPPERLAND (ペパーランド)の主宰者である能勢さんが、ご自身の活動のなかで収集されてきた 3 万枚を超えるレコード音源からセレクトして、音楽のスペクタクル(変遷史)をたっぷりと語ってくださいました。LP や CD のジャケットを掲げながら、懐かしい音楽、聴いたこともない音楽が次々とかけられ、音楽のムジックが楽曲の合間に、また重なるように多様に語られます。

能勢さんはペパーランドを始めた二十代の頃に「ロックマガジン』という音楽雑誌で、新着レコードのヴァイナル紹介記事の仕事を通じて、その雑誌の名編集長・阿木譲さんから「音楽を聴いて、音楽に関して人に責任のあることを伝える人間は、自分でレコードを買っていくものだ」と教えられたことが、この破格なレコード・コレクションのきっかけとなりました。

ペパーランド立ち上げの際に影響を受けたのは、ロナルド・ナメス監督作品「ウオーホル E.P.I」の映像で「エクスプローディング・プラスティック・イネヴィタル」という表現空間が描かれていました。そこではヴェルベット・アンダーグラウンドの演奏や詩の朗読やパフォーマンス、ライトアートや映画の上映がおこなわれていました。能勢さんもまた、それまでの時代と違う、自分たちで思うような芸術的な活動を手がけることに興味をもち、「日本で、最初に映写設備を備えたライブハウス」PEPPERLAND を立ち上げました。

「ライブ演奏ばかりではなく、映画、詩、踊り、演劇、講演など、さまざまなものをミックスして存在させることができる、まったく新しい表現空間をつくりたかった」。今回のお話も音楽の動向にとどまらない、ジャンルを横断したもの。時代の動向、流行、風俗、精神の変化、そこから生まれた新しいアート・スタイルなど、レコードを次々とかけながら、ご自身の体験や考えをふんだんに折り込んで語られ、三夜のレクチャーから見い出されたのは、図らずも 2010 年『山のシューレ』を貫くグランド・テーマ「言葉・身体・環境」と三位一体構造に重なったカルチャー・スペクタクルでもありました。

能勢さんが紹介しようと持ち込まれたレコードは二百枚を超える。

三夜のレクチャーを語って尽きない。

観季館ゲストホールは夕刻から深夜までさまざまな音楽で埋め尽くされ、たくさんのゲストが思い思いに楽しんだ。

PEPPERLAND MUSICK SPECTACLE 三夜連続特別企画

第一夜〈環境〉調性音楽の解体から始まったオルタナティブ・ミュージック

【＃1 DADA の騒音音楽による音楽の解体】
【＃2 Noise-Music と工業音楽の発生】
【＃3 ELECTORO BODY MUSIC】
【＃4 工業神秘主義を昇華した POST INDUSTRIAL MUSIC】
【＃5 ネオゴシック/ファクトリーが象徴した時代精神】

最初に、ナチズム崩壊直後に開催された「ムジカ・ヴィヴァ」という音楽祭の紹介を通じて、クラシックとロックを繋ぐ「空白の音楽史」が語られた。近代社会の黎明期を告げる工業化。その環境の変

化の中から「既存の文化・芸術の否定」を掲げたダダや未来派、デ・ステイル、バウハウスの芸術思想を経過しながら音楽に顕れたモダニティの問題が立ち現れてくる。モダニズムが求めた速度・力・騒音は近代化が見せたダイナミックな美の礼賛であり、インダストリアル・ミュージックを生み出した。

近代化の中で工業社会が生み出す工場のビートを取り入れて、インダストリアル・ミュージックは、人体整流音楽へと発展した。人間の「身体」性と融合することで工業神秘主義音楽と呼ばれるものに変貌し、エレクトロ・ボディビート、そして JOY DIVISION や NEW ORDER という今日の新感覚音楽の基盤を形成した。ポップ・ミュージックが産業社会のなかに組み入れられることで本来の力を失い、代わってパンクとオルタネイティブ・ミュージックが生まれてきた状況を辿りながら、オルタネイティブ・ミュージックへの導入部を位置づけた。

第二夜〈身体〉霊的覚醒から変性意識状態と向かい合った音楽は

人間に大気圏外進化を促す。

【＃1 オカルティズムと lndustrial mysty-Music】
【＃2 Industrial mysty-Music】
【＃3 ティモシー・リアリー「リアリーズム」と呼ばれたサイケデリック宇宙進化論】
【＃4 Archaic Communication】
【＃5 Neo Psychedelic MUSIC】
【＃6 "E" Culture に繋がる Psychedelic MUSIC】

オルタネイティブ・ミュージックによる意識変革への目覚めは、変性意識に作用することによって、より深く人の生き方を深部から変えていく力を音楽に与えた。そのために新しいサイケデリック感が求められ、オカルティズムや幻覚物質をも使用するテクノ・ユンギアンが輩出した。真に"力"、を持つ音楽の背後には、必ずこうしたサイケデリックな変性意識世界へのアクセスが希求された。この点がポピュラー・ミュージックと異なる。しかし、音楽の歴史を振り返ってみると、古来から程度の差こそあれ日常を異なった体験として受け取る意識変容(サイケデリック)の歴史でもあった。このことを踏まえながら、現代の音楽に強く影響を与えた神秘主義者や精神科学者、薬理学者とクロスした音楽の系譜が紹介された。
続いて、この意識変容をおし進めている“E"カルチャーが紹介された。

日常の条件付け・支配・操作された社会に安住せず、それらを決定している人間の意識・精神・自我と真摯に向かい合い、やがては外宇宙で生活する存在へと向かって進化せざるを得ない人間「身体」の現実を用意する音楽史が語られた。大気圏外進化を前提とした変性意識に作用する新

たなサイケデリック・ムーヴメント。善悪を超えて、感覚変容の実験の場として、音楽は麻薬・ドラッグ・セックス・狂気などをも直視し、先端技術と古代魔術を合体化したケイオス・マギックに立ち向かい、次世代の意識を音楽の中に用意しようとした流れを紹介した。
※"E"カルチャー
ELECTRONIC REVOLUTION(電子革命)、ECOLOGY(環境)、ECSTASY(エクスタシー)、EVOLUTION(進化)、EXO-TERRA(脱地球)の総称。

第三夜〈言葉〉ビート・ジェネレーションとストリートカルチャーがクラブミュージックを産み多様化する音楽。

【＃1 ウィリアム・S・バロウズとビート・ジェネレーション。カットアップとフォールドイン・メソッドが音楽を始めとした文化に与えたこと】
【＃2 Hip-Hop & Graffiti】
【＃3 ガラージ・ミュージッククラブ・カルチャーの誕生】
【＃4 CHICAGO HOUSE MUSIC】
【＃5 N.Y. HOUSE MUSICS】
【＃6 DETROIT TECHNO MUSICS】
【＃7 OTHER SIDE OF THE MUSICS】
【＃8 DRONE MUSIC】

バロウズ以前は「文学は音楽より 30 年遅れている」と言われてきた。ビートニクスの一翼を担ったバロウズの「言葉」の先見性こそが、今日のクラブ・カルチャーの基盤と手法を形成し、「文学」が「音楽」を牽引する逆転の状況が語られた。デュシャンの『音楽的誤植』を先駆に、バロウズが文学の新たな手法として扱ったカット・アップやフォールド・イン・メソッドは、単なる文体編集ではなく、意識下へアクセスする表現手段として、ハウス以降のサンプリング、リミックスカルチャーとして使われていく。また、バロウズが属した「ビートニクス」は今日のストリート・カルチャーへと繋がるユース・カルチャーの原点でもあった。

グラフィティのワイルドスタイルを生みだしたラメルジーは、武装化した文字「アルファーズ・ベット」を創出し Hip-Hop と深く関わった。そしてマイノリティ視されてきた人種差別・ゲイ・エイズ・ドラッグなどの問題を抱えながら、ガラージ・ミュージック以降の多様化し続けるクラブカルチャーの変遷と現在見逃せないドローン・ミュージックまでの類例のない音楽史が紹介された。